

「日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN)」は、河川再生について共に考え、次の行動へ後押しする未来志向の情報を交換・共有することを通じ、各地域に相応しい河川再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的に活動する団体です。またアジア河川・流域再生ネットワーク (ARRN) の日本窓口として、日本の優れた知見をアジアに向け発信し、海外の素晴らしい取組みを国内に還元する役割を担います。

## 目次

	Pages
➤ JRRN 事務局からのお知らせ.....	1
➤ 会員 寄稿記事.....	3
➤ JRRN 会員・ARRN 関係者からのお知らせ.....	18
➤ 会議・イベント案内.....	19
➤ 書籍等の紹介.....	19
➤ 会員 募集中.....	20

## JRRN 事務局からのお知らせ (1) JRRN Activity Report

## 「小さな自然再生」事例集編集委員会 若手“公募委員”募集結果のご報告

JRRN ニュースレター前号でもご案内の通り、JRRN では今年度、市民が河川管理者と連携して日曜大工的に取組める「小さな自然再生」に関わる事例集を、本分野有識者の協力を得ながら制作し、全国に普及する予定です。

この取組みを始めるに当たり、5月中旬から5月末までの2週間にかけて、本事例集に編集委員会メンバーとしてご参加頂ける若手の「公募委員」を全国から募集し、8名の方々よりご応募頂きました。

6月上旬には公募委員を選考させて頂き、有識者委員と公募委員を交えた『第1回「小さな自然再生」事例集編集委員会』をキックオフに、以下のスケジュールで本活動に取り組んでいく予定です。

## &lt;「小さな自然再生」事例集制作スケジュール(案)&gt;

- 6月：第1回 事例集編集委員会
- 9月：第2回 事例集編集委員会
- 秋頃：「小さな自然再生」座談会
- 秋頃：第3回 事例集編集委員会
- 12月：「小さな自然再生」事例集完成
- 来年1月以降：事例集の全国普及

本活動の進捗は、JRRN ホームページやニュースレター等を通じて JRRN 会員皆様に随時ご紹介させて頂きます。

こうした取組みを通じ、身近な川の自然再生活動への市民参加が更に促進され、地域と河川管理者の連携推進に寄与することを目指して参りますので、皆様のご協力よろしくお願い致します。












### 「小さな自然再生」事例集制作 川の専門家と一緒に冊子の編集をしませんか？ 編集委員会 若手“公募委員”募集 (5月31日(土) 応募〆切)

2014年5月 日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)では、今年度、市民が河川管理者と連携して日曜大工的に取組める「小さな自然再生」に関わる事例集を、本分野有識者の協力を得ながら制作し、全国に普及する予定です。(12月頃に事例集完成予定)

そこで、**本事例集制作に編集委員会メンバーとしてご参加頂ける若手の「公募委員」を募集致します。**小さな自然再生に実践的に関わってこられた専門家の方々が一堂に集まり、一緒に作業することを通じ、施工上の工夫や効果、失敗談など、論文等には載っていない“ここの話”などを聞くことができます。下記募集要項をご確認の上、ご応募お待ちしております。

<実施体制>

※「小さな自然再生」事例集 編集委員会 公募委員以外の委員 (予定) <五十名程度>

石瀬清夫 (北海道技術コンサルタント)、浜野隆夫 (徳島大学)、林博徳 (九州大学)、原田守吉 (自然共生研究センター)、三橋弘宗 (兵庫医科大学)、吉富友枝 (東京学芸大学)

※「小さな自然再生」事例集 監修

玉井信行 (東京大学名誉教授・JRRN 顧問)

**【主な活動内容】**

1. 事例集編集委員会への参加 (6月、9月、11月の3回、東京にて平日開催予定)
2. 事例集編集作業の協力 (内容や作業量等はご相談させて頂きます)

**【募集人数】** 若干名

**【応募条件】**

本分野に関心のある若手 (20代~30代) の研究者 (学生含む) や実務者 (行政・民間)

**【待遇】** 無給 (謝金、交通費等の支給はありません)

**【応募方法】** 氏名、所属、連絡先 (住所・電話・email)、志望動機 (200字以内) を下記申込先まで email にてご応募下さい。

※応募多数の場合は、当方で選考し、お断りする場合がございますのでご了承ください。

**【応募期間】** 2014年5月16日(金)~5月31日(土)

**【公募委員特典】**

1. 事例集内の制作メンバー欄に、氏名、プロフィール等を掲載させて頂きます。
2. 事例集冊子2部を贈呈します。(電子版はJRRNウェブサイト上に無償公開)
3. 本分野の最新知見を習得でき、また人材ネットワークを形成できます。

**【応募申込み・お問い合わせ】**

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)事務局 担当: 後藤謙洋・和田彰

〒104-0033 東京都中央区新川1-17-24 新川中央ビル7階 (公認) リバーフロント研究所内

Tel: 03-6228-3862 E-mail: [info@a-rr.net](mailto:info@a-rr.net) Website: <http://www.a-rr.net/jp/>

公益財団法人河川財団による河川整備基金の助成を受けています

公募委員募集案内チラシ

※詳しくはこちら

<http://jp.a-rr.net/jp/news/info/438.html>

(JRRN 事務局・和田彰)

『桜のある水辺風景 2014』 公募終了とお礼

JRRN では、水辺の美しさや人々との関わりについて考えるきっかけづくりを目指して、今年で 5 回目となる『桜のある水辺風景』の募集を行いました。募集期間の平成 26 年 3 月 3 日～5 月 31 日で、22 名の方より素敵なお写真をご応募頂きました。

応募いただきましたお写真とコメントを取りまとめた『桜のある水辺風景 2014』写真集を現在編集中です。完成後、6 月中旬頃を目標に、以下のホームページ上でご紹介させていただきます。(同ホームページにおいて、過去 4 回の写真集も合わせて公開しておりますのでご覧下さい。)

◆公開先 (6 月中旬掲載予定)

<http://jp.a-rr.net/jp/activity/publication/category/cherryphotos>

皆様からご応募頂きました桜のある水辺風景写真を通じて、水辺の魅力や美しい日本の春を再認識することができました。今回ご応募頂きました皆様に厚く御礼申し上げますとともに、今後とも引き続き JRRN に皆様からのご協力・ご尽力いただけますようお願い申し上げます。



(JRRN 事務局・後藤勝洋)

連載「水辺からのメッセージ」が開始から 6 年目に突入！ & 新刊「親水空間論」ご案内

JRRN ニュースレターで毎月連載している「水辺からのメッセージ」が今月で第 61 号を迎え、2009 年 6 月の開始から 6 年目に突入致しました。

これまでのバックナンバーへは以下の JRRN ホームページ内専用ページからアクセスできますので、これからの暑い季節、涼と癒しを求めてご覧頂ければ幸いです。



◆【連載】水辺からのメッセージ公開先

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/category/mizube>

また、この「水辺からのメッセージ」を毎月寄稿頂いている岡村幸二さん (JRRN 会員) が執筆に関わられた書籍が 2014 年 5 月に発刊されましたので、岡村さんからのメッセージと合わせてご紹介致します。

「親水空間論 時代と場所から考える水辺のあり方」

- 編集： 日本建築学会
- 出版社： 技報堂出版
- 出版年月日： 2014 年 5 月 20 日
- 価格： 3,456 円 (税込)



＜岡村さんからのメッセージ＞

「親水機能」という概念は、1971 年に土木学会の発表論文で初めて提起されました。土木の分野では流水の変化する法河川を扱うことが多いようですが、建築学会からの本書籍では、「親水の場所」を人々に身近な湖沼・池や用水にまで拡大し、改めて「時代」と「場所」を幅広く捉えた「親水空間論」が展開されています。

(JRRN 事務局・和田彰)

市民や企業からの応援を得たい環境団体を募集します ～「川の応援団(通称:川サポ)」のご紹介～

寄稿者：田中五月（一般社団法人 ClearWaterProject・JRRN 団体会員）

河川環境改善を実施されている皆様に「川の応援団」というサービスをご紹介します。

私達 ClearWaterProject では、河川環境のモニタリングツール AQMAP に加えて、間もなく以下の 2 サービスをリリースします。

■AQMAP ⇒河川の改善方法を共有することで、水辺環境改善を推進 <リリース済み>

■川の応援団 ⇒環境団体を資金面でサポートすることで、水辺環境改善を推進 <2014/8 月上旬リリース>

■川遊びマップ ⇒一般の方向けに楽しい川遊び情報を PR し、川ファンを増やすことで、水辺環境を改善する土台を作る <2014/7 月上旬リリース>

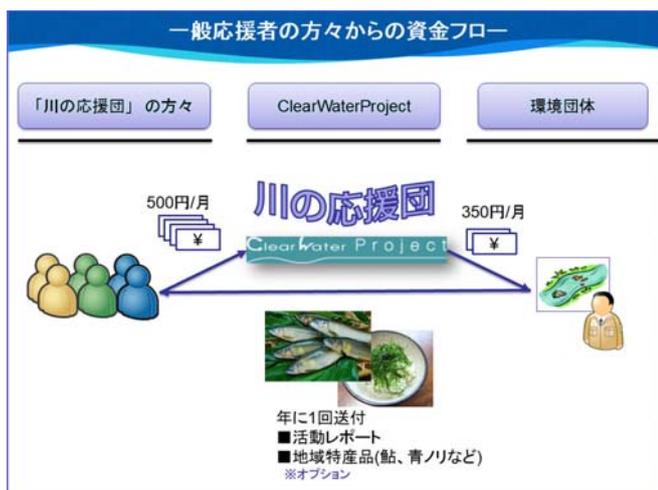
今回は、「川の応援団」のご紹介です。

1. 「川の応援団」サービス概要

資金面で水辺で活動する環境団体を応援するサービスです。具体的な資金提供方式は 2 通りあります。

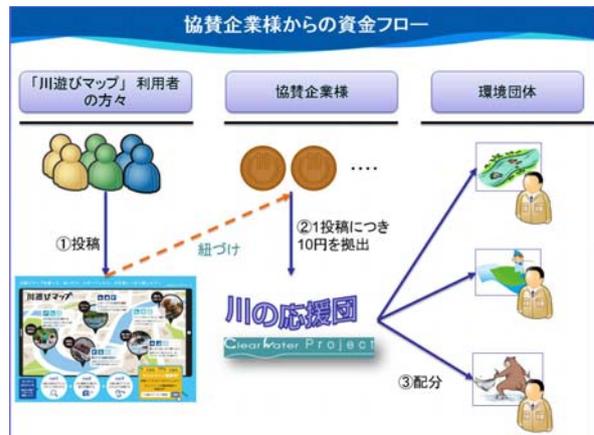
① 一般応援者の方々から資金を集める仕組み

環境団体を応援して下さる方々から、500 円程度/月額という負担にならない金額で資金を集め、その 70%が環境団体へ、30%が ClearWaterProject のシステム運営費となります。



②協賛企業様から資金を集める仕組み

上述の川遊びマップでは、speedo 様など協賛企業より、2014 年 7 月-10 月の間、1 投稿につき 10 円が「川の応援団」へと拠出されることが決まっています。拠出金額は「川の応援団」対象団体に配分されます。



今後、対象環境団体の選定は 1 年毎に実施します。

2. 「川の応援団」参加団体へのご願い

広く一般の方々からの賛同を得るため、以下のような情報を提示する Web サイトを団体毎に作成します。

- ・参加団体 概要(組織目的、人数など)
- ・直近 1 年で実施予定の活動目標
- ・過去の実績 etc.

Web サイトの作成、資金を集めるシステム構築は ClearWaterProject で実施しますが、元情報となる上記データの提示をお願いする予定です。

また、1 年単位で区切った活動とするため、毎年 4 月に「活動レポート」と「地域特産品(オプション)」の送付をお願いします。地域特産品を出す、出さないは各団体の意思によりますが、川に関する「ふるさと納税」のような位置づけにしたいと考えていますので、ご協力頂けますと幸いです。

3. スケジュール

- ～6/15(日)： 対象団体募集締め切り
- 6/16(月)～6/29(金)： 対象団体選考
- 6/30(月)～： Web サイト作成、システム構築
- 8月上旬： 「川の応援団」サービスリリース

4. 連絡先

興味を持たれた方は、【川サポ問い合わせ】という件名で、[[kawa-supporters@clearwaterproject.info](mailto:kawa-supporters@clearwaterproject.info)]までご連絡下さい。必要書類を送付させていただきます。

## 欧州の河川整備事例を訪ねて

寄稿者：安藤 達也（株式会社建設技術研究所・JRRN 会員）

### 1. はじめに

私の所属する株式会社建設技術研究所は 2013 年に株式会社設立 50 周年を迎え、記念事業の一環として社員が自由にテーマを設定して海外調査に行ける機会があった。本稿では当事業で、昨年 10 月下旬に 2 週間程度欧州の河川の視察に行った際の様子をご紹介します。いただきたいと思う。

視察に当たっては、JRRN のネットワークや、会社の枠を超えた河川技術者のご好意に支えられて、欧州の河川整備事例や関係する方々を紹介していただき、非常に有意義な経験をさせていただいた。本稿では、簡単な紹介とはなるが、多くの方々のお陰で得られた見聞を少しでも皆様に還元し、海外や日本の河川に関しての何らかの議論の一助となれば望外の幸いである。

### 2. 調査背景

日本は人口縮小社会を迎えていく中で、社会基盤に対してこれまでどおりの投資を続けた場合、維持管理費・更新費が社会基盤に対する投資可能額を上回り、近年更新できないストックが多く出てくるという試算がある。一方で、東日本大震災以降、想定外に対する備えへの必要が叫ばれ、防災や減災のためのインフラの需要は高まっている。

そのような環境の中では、ソフトとハードをうまく使い分けることが必要になってくると考えられる。国や自治体は必要最低限のインフラ（ハード）を提供し、それ以上は住民がソフトで対応するなど、地域の実情や環境に応じていわば幅（余裕）を持った計画論が必要となるのではないだろうか。

住民自治や地方分権が進んでいる欧州では、時間的にも空間的にも幅を持たせた柔軟な河川整備が行われている。そしてそれは結果的に治水の観点だけでなく、河川環境や景観などの観点についても効果を発揮している。本稿では視察で見た中の事例をいくつかご紹介させていただきたいと思う。

### 3. 平常時と災害時の使い分け

モバイルレビー（可搬式特殊堤防）という堤防がある。普段河川の水位が低いときは堤防は設置されておらず、洪水が来そうと予測されるときになると、水防団等の組織により仮設の堤防を設置して洪水に備えるというものである。設置には人手が必要で時間もかか

るため、洪水の伝播が予測しやすいドナウ川などの主に長大河川で多く見られる。

日本でも、揖保川・長良川などの河川では「畳堤」と呼ばれ、洪水時には堤防に畳をはめて仮設堤防とするものは見られるが、このような自衛水防の取り組みはまだまだ少ない。

オーストリアの首都ウィーンから東へ 100km ほど、ドナウ川のほとりにあるシュピッツ(Spitz)村では、このモバイルレビーによりドナウ川の洪水に備えている。世界遺産のバッハウ渓谷沿いにある街で、川には遊覧船が行きかう。ここでは川からの美しい景観を妨げないように堤防は極力設置したくないという主張と、出来る限り治水安全度を高めたいという主張の議論の末、モバイルレビーを設置することになった（写真 1）。

モバイルレビーは台座（1m 程度）と防水壁（2m 程度）からなり、建築家が景観に配慮して設計した。UNESCO や ICOMOS 等の国際機関への了承も得ている。モバイルレビーは地元の消防団が設置し、人員 100 人・トラック 4 台・クレーン車 2 台が出動しておよそ 20 時間で設置が完了するという。モバイルレビー設置時の対象洪水は 1/100 となっている。実際 2013 年 6 月の洪水で設置され、効果を発揮したという。



写真 1 ドナウ川バッハウ渓谷のモバイルレビー

もうひとつの例をごらんいただきたい。スイス・チューリッヒから南東へ 150km ほど、ライン川支川ヴァルサーライン(Valsler Rhein)川沿いにあるアルプス山脈ふもとの山あいの小さなヴァルス(Vals)村。過去から水害の多い地域で、かつては壊滅的な水害に見舞われ、住民が真剣にアメリカへの移住を考えるほどであった。

ヴァルスでは 2006~11 年にかけて河川整備が行われた。本来は川の両岸に堤防が整備されることが望ましいが、住民との議論を踏まえ、右岸の住宅が密集し氾濫被害のリスクが高いところを有堤区間とし、相対的に住宅が少なく左岸は一部のみ有堤区間とし、それ以外は無堤区間とし、洪水時はモバイルレビーを設置して対処するものとした(写真 2)。ヴァルサーライン川は山あいの川で降雨からピークを迎えるまでのタイミングが早く、一般的にはモバイルレビーの準備はしにくいのが、上流のダム水位や降雨予測を基に対応しているという。また新設橋梁や堤防は、建築の専門家のアドバイスも踏まえながら地元産石材のヴァルス珪岩を用いて整備し、周囲の家並みに調和した景観となっている(写真 3)。



写真 2 ヴァルス村のモバイルレビー



写真 3 ヴァルス珪岩でできた橋梁・堤防

また、Milchbrücke と呼ばれる橋は、堤防整備に合わせて既設位置より 1m ほど高い位置の堤防天端の上にかねおされる予定であったが、車いすが通行できるようにという住民の要望に応え、持ち上げ式に改築

された。洪水時はバランスウェイトを使って、長手軸周りに傾けて持ち上げ、洪水の流下を阻害するのを防いでいる(写真 4)。

一律の河川整備ではなく、住民の要望や議論・地域の実情を踏まえ、きめ細やかな河川整備が行われていると言える。



写真 4 ヴァルス村 Milchbrücke  
(INTERNATIONALE RHEINREGULIERUNG 資料より)

#### 4. 川にもっとスペースを

前節のモバイルレビーを用いた河川整備が時間的に幅を持った河川整備とすると、本節では空間的に幅を持った河川整備を見ていきたいと思う。

スイスやイギリスの河川整備を視察する中で、河川技術者の方々がしきりに“Give more space/freedom to the river. (川にもっとスペースを、自由を)”という話をしていたのが印象的だった。「川を整備する」というより「川を整備してもらう」という視点である。(もちろん同じ川の専門家でも、治水や環境等バックグラウンドによって考え方の違いはあるだろうが。)

スイス東部トゥールガウ(Thurgau)州からチューリッヒ近郊にてドナウ川に合流するトゥール(Thur)川は、長い年月をかけて徐々に川を自然に戻していく試みが進んでいる。従来は河川の低水路は護岸で固められて流路がまっすぐ単調であったが、低水路護岸を取り払い、低水路幅の拡幅(流下能力の向上)・自然な川の滯筋の形成を期待する整備を行った。結果、単調で様に流れていた川には瀬と淵が形成され、滑らかな滯筋を描いて流れるようになった。しかし一方で、規模の大きい出水がくると、水衝部より侵食が進み、川は徐々に蛇行して行き、農地や河畔林にまで侵食が進んでいる(写真 5)。トゥール川の低水路は州の公有地であったが、高水敷やそこに隣接する農地や河畔林は私有地であり、州は所有者との粘り強い議論を通して徐々に土地を購入し公有地化している。スイスは山岳国で土地が狭く、農家の土地に対する需要はとて高い。公有地化する際には、農家は土地がなければ生計

が立てられないので、土地を売り、補償金をもらって解決することはほとんどなく、近隣の公有地と川沿いの土地を等価交換という形でこういった整備を進めているという。

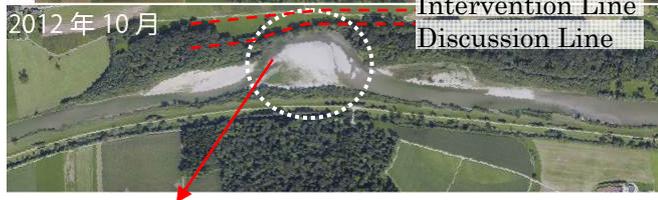


写真 5 トゥール川の流路の変遷

またもちろん、川に自由をと言いつつ、無計画に侵食を許容しているわけではない。トゥール川ではあらかじめ川に沿って Discussion(Observation) Line と Intervention Line という二つのラインを設定し、川の侵食許容ラインを定めている。それぞれ観察ライン、調停ラインとでも訳すべきだろうか。原則的に Intervention Line は公有地と私有地の境界に設定し、その少し手前に Discussion Line を設定している。Discussion Line を超えるまでは自由に川を蛇行させ、もし Discussion Line を超えたら河川と生態学の専門家、地元の土地所有者らの共同体が協議して、何らかの侵食対策をとるかどうかを決める。これらのラインは州政府が土地を購入していくと、また再設定される。

実際、トゥール川では蛇行が進み、2013年には流路が Discussion Line を越えてきたため、今後どのような対策をするか現在議論が進行中であるという。

背景にはスイスで 2011 年に改正された水保護法の

施行がある。第 36 条に Space provided for waters の条項があり、州政府は①流水の自然機能(the natural functions of the waters)、②洪水防御(flood protection)、③水利用(the use of the waters)を保証するために 2018 年をめどに川のスペースを確保することが定められている。もちろん、この法律の施行の際には川沿いで土地を失うことになる農業関係者との十分な議論がなされたという。

あらかじめ川の形をどうするかということを決めるのではなく、川の侵食状況を見ながら時間をかけて川に向き合っていこうとする姿勢がうかがえる。スイスではトゥール川以外の河川においても、同様の手法により川幅を広げる取り組みが進んでいる。

## 5. まとめ

モバイルレビーによる洪水対策、侵食許容ラインを設定して川幅を拡幅する河川整備と二つの例を見てきたが、地域住民とは議論を尽くしたうえで、いずれも堤防を建設したり計画を立てたら終わりではなく、洪水が来たら水防活動を実施し、河岸の侵食が進みすぎてないか定期的に確認するなど、常日頃から川に目を向け、手間暇をかけることが必要となっている。ただ、社会基盤への投資額や維持管理を考えると、過剰な設備を作りすぎて投資額や維持管理がかさむこともなく、ソフトとハードをバランスよく組み合わせる持続可能な維持管理ができていないのだろうか。

今後の社会基盤整備では、何事もすべてをハードに任せるのではなく、地域住民の意見や、地域の実情に合わせてソフトも併用し、対応していくのが望ましいと考える。多くの場合コストや維持管理費も抑えられるし、結果として必要な安全度も確保でき、河川環境・景観の観点からもメリットがある。洪水形態の違い、土地条件の制約、河川観等の違いはあるものの、欧州での幅を持たせた柔軟な河川整備方法はこれからの日本にも参考に出来ることは多いのではないかと思う。

\* \* \*

今回の視察は、ほぼ終始一人で海外に赴き、多くの方々にお会いし、川を案内していただくというものだった。はじめは不安なことばかりだったが、現地で川を見ながら話すということは多少言葉の壁はあったとしても、共通のフィールドであるため、想像していたよりはコミュニケーションはとりやすいと感じた。興味・関心のあることには何事も飛び込んでチャレンジしてみようと度胸を得られたように思う。最後に今回の貴重な機会を支えていただいた多くの関係者の方々に、最大限の感謝の意を表して本稿を締めくくりたい。

長崎県東彼杵町の「宝」紹介

寄稿者：筑波大学白川（直）研究室（JRRN 団体会員）  
東彼杵プロジェクトチーム

1. はじめに

長崎県東彼杵郡東彼杵町は大村湾に面した面積約75km<sup>2</sup>、人口約8,800人の町である(表1)。今、東彼杵町は川を活かしたまちづくり、まちを活かしたかわづくりを模索している。2013年12月に、筑波大学の学生を主体とするプロジェクトチームが現地を訪問した。その時に、プロジェクトチームが東彼杵町に対して感じた印象を整理した。

東彼杵町の急峻な地形と海に面した温暖な気候は、みかんや茶の栽培に適している。特にそのぎ茶は東彼杵町の名産としても有名である。山地率は68.2%、耕地率は17.3%となっている(全国平均：山地率68.3%、耕地率13.1%)。

東彼杵町を流れる河川は東の多良山系を水源とし、西流して大村湾北東部に注ぐ。大村湾に流入する二級河川は23河川あり、そのうち4本は東彼杵町を流れる。北から順に彼杵川、千綿川、串川、江の串川であり、これらをここでは東彼杵4河川と呼ぶものとする(図1)。全長7~12km、流域面積はいずれも30km<sup>2</sup>に満たない(表2)。河床勾配は1/10~1/23と急である。ただし串川は、河口から5kmまでは1/500程度である。

2. 楽しみ方に基づく場の分類

2013年12月7日に現地を訪れ、図1に示した10箇所を案内していただいた。これらの箇所はそれぞれ東彼杵の「宝」ともいえる潜在的価値を持っているように思えた。それらの箇所は、風景として魅力があるものもあれば、その場に立つこと自体が心地よいと感じる場所もあった。そういった観点から、訪れた10箇所を『遊ぶ場』、『眺める場』、『広がる場』の3種類に大別できると考えた。

『遊ぶ場』は、歩く、泳ぐ、水しぶきを感じる、などがあげられる。『眺める場』は、遠くから見る対象に対して満足感が得られる機能を持つ場のことを指す。『広がる場』は、開放感を得られ、景色の広がりとともに気持ちも広がるような場所である。

以上の3つの観点から、訪問した10箇所の魅力を述べていく。

表1 東彼杵町の人口<sup>1)</sup>と面積<sup>2)</sup>

人口(人)		面積(km <sup>2</sup> )	
15歳未満	985	可住面積	29
生産人口 (15歳~64歳)	5,157	耕地面積	12
65歳以上	2,617	その他	34
計	8,759	計	75
		山地率(%)	68
		耕地率(%)	17

表2 東彼杵町4河川の諸元  
(プロジェクトチーム計測)

河川名	彼杵川	千綿川	江串川	串川
水源	中山	遠目山	群岳	中池
水源標高(m)	466	849	826	360
流路延長(km)	10.4	11.9	8.1	4.1
流域面積(km <sup>2</sup> )	25.36	27.46	11.77	4.00
平均河床勾配	1/23	1/14	1/10	1/11



図1 東彼杵4河川と踏査箇所



図2 やすらぎの里河川公園



図4 龍頭泉



図3 彼杵川河川公園



図5 鰻塚

### 3. 『遊ぶ場』

#### (1) やすらぎの里河川公園

江の串川のほとりの河川公園は1998年(平成10年)に完成した(図2)。1990年(平成2年)6,7月にかけて、東彼杵を含む九州北部は総雨量600mmを超す豪雨にみまわれた。この豪雨により、各地の河川で堤防の決壊やがけ崩れが相次ぎ、住宅の全半壊100戸以上、床上・床下浸水1万戸以上、死者・行方不明者27名という甚大な被害が発生した<sup>3)</sup>。江の串川でも氾濫が起き、床上・床下浸水により市民生活に大きな影響が及んだ。現在では、非常に緩やかな傾斜護岸や川沿いの遊歩道などが整備されているほか、迫力ある大樽の滝が河川公園のシンボルとなっている。訪問時は冬だったため木の葉は落ちていたが、植栽もよく整備されており、春には美しい花が見頃を迎えると期待される。

#### (2) 彼杵川河川公園

彼杵川の河口から約3km地点に彼杵川河川公園がある(図3)。川に近づきやすい護岸形状になっており、水深が浅く流れもほとんどなく水遊びには最適である。

当チームメンバーも東彼杵清流会の池田氏にウェットスーツを借り、泳いだり、河川公園に常設されているカナディアンカヌーを漕いだりして彼杵川を楽しんだ。この付近にはアユが遡上してきて、産卵を行っている。川底は小さな石が隙間をつくりながら分布しており、アユの産卵場として適している。

楽しんだあとは、前東彼杵小学校校長の横尾先生のご厚意で豚汁を頂き、冷えた体を温めた。遊び、食べて、集うことができるこの河川公園は親水空間としての機能を果たしている。



図6 千綿駅舎



図8 坂本郷の棚田



図7 千綿駅ホームから眺める大村湾

### (3) 龍頭泉

千綿川は4河川の中で最も長く、流域面積は最も広い。千綿川中流部に龍頭泉と呼ばれる名瀑があり、落差15m、滝壺の深さは23mである<sup>4)</sup>(図4)。名称は、江戸時代の儒学者・広瀬淡窓が、大村藩主に招かれて千綿溪で遊んだ際、その美しさに心を打たれ、渓谷全体を称し、「まるで巨大な龍が横たわっているかのようだ。」と評し、名づけられたものと伝えられている(地元の人によると滝直下から滝を仰ぐと龍の頭のように見えたという説もある)。

徒歩で滝つぼの手前まで近寄れるので、流れ落ちる滝を間近で眺めることができた。その迫力は、広瀬淡窓が龍を連想したというのも頷ける。

### (4) 清心橋下流部

千綿川の清心橋下流区間では、自然な川と触れて遊ぶことができる。水深は膝下程度であり、小さな子供でも昔ながらの魚捕りを楽しむことができ、初夏にはホタルを見ることができる。

また、過去に地元の内水面振興会がコイを放流し

たが、現在ではコイが生態系を乱すことが分かったため、鯉の個体数を減少させる努力が行われている。そのため、自由にコイを捕ってもよいらしい。

川のいたるところに鰻塚(図5)が見られた。鰻塚は円形に積まれたウナギを採るための仕掛けである。伝統漁法の見られる河川空間は河川文化としても価値がある。

## 4. 『眺める場』

### (1) 千綿駅

JR大村線は大村湾沿いを走っている。中でも千綿駅(図6, 図7)はホームが海に面した風光明媚な駅である。駅舎に入りホームに上がると、大村湾と弓なりに続く線路が視界に飛び込んでくる。この駅は写真家や鉄道マニアの間でも人気がある。また、無人駅ながら駅舎は手入れが行き届いており、待ち時間に本を読める書棚などもある。これらの様子から、千綿駅が地元の人々に愛されていることがひしひしと伝わってくる。

地元の人々の想いもあり、2013年4月に長崎県まちづくり景観資産に登録された。

### (2) 彼杵川源流／坂本郷の棚田

彼杵川の上流域にあたる坂本郷には、湧水を活かして周辺には棚田が形成されている(図8)。この辺りは台地の切れ目となっている箇所であるため、あちこちに湧水が見られる。山際に何段にも連なる棚田は日本の原風景の象徴ともいえる。山間に棚田と民家が共存し、その谷間を彼杵川が穏やかに流れていることにより美しい里山の風景を作り出している。

## 5. 『広がる場』

### (1) 四ツ池(蕪池／中池／三井木場池／鹿ノ丸池)

江の串川、串川、千綿川の上流域にはため池群が形成されている。これらは江戸期からのため池で、蕪池、中池、三井木場池、鹿ノ丸池は四ツ池(図9)と呼ばれている。これらの堤は堤高がいずれも15m

以下であるため、日本におけるダム の定義からは外れるが、立派に利水ダム機能を果たしている。これらの池の建設は江戸時代に捕鯨で富を得た深澤義太夫に遡る。深澤義太夫勝清は現在の佐賀県武雄市北方町芦原に生まれ、30歳過ぎ、紀州（和歌山県）の太地浦で捕鯨の方法を学び、大村に戻ると鯨組を組織した。そして、五島方面での捕鯨により、巨万の富を手に入れた。その富を大村藩の新田開発に提供し大村藩内の山間部にため池をいくつも建設した<sup>5)</sup>。四ツ池の一つである、三井木場堤を建設したのは勝清である<sup>6)</sup>。その後、1663年に跡を継いだ2代目の義太夫勝幸も網捕捕鯨により富を得て、引き続き私財を投じた。勝幸は四ツ池の蕪堤、中堤、鹿ノ丸堤（金丸堤）を建設した。深澤家の私財投資は大村湾沿岸の上流域の傾斜地の新田開発に寄与し、発展に貢献した。今日まで現存し、活用されている四ツ池は歴史的に見ても素晴らしい価値がある。東彼杵町のキャッチコピーに「お茶とみかんとくじらのまち」と謳われていることも、納得できる。現地で見られる四ツ池は山々に囲まれた位置にあり水面に反転した山が映り、そして美しいため池風景を残す。

たつぷりと水をたたえた姿は自然の湖のようで、レジャー利用もできるのではないかと思わせる。自然を満喫しながら広々とした池でのカヌーは気持ちいいこと間違いなしである。地域の利水史に深くかかわっていることから、歴史遺産としても多くの人に訪問してもらいたい。

## （2）大野原高原

大野原高原（図10）は東彼杵町の上流域にある高原地帯である。大部分の敷地は陸上自衛隊の大野原演習場になっており、平日は訓練をしているが、休日は高原地帯に入って自由に楽しむことができる。高原一帯は勾配がゆるくなっており、風景に奥行きある風景が広がっている。丘陵地に時折吹く風が耳元をそよぎ、心地よい空間である。東彼杵町は急勾配な地形が多く、上流部などは谷地形が多いが、この場所は上流部でありながら傾斜が緩く、開けた場所となっており、開放感が感じられる貴重な場所である。陸上自衛隊の演習場であることを忘れさせるような長閑な場所であり、ぜひ足を運んでもらいたい。

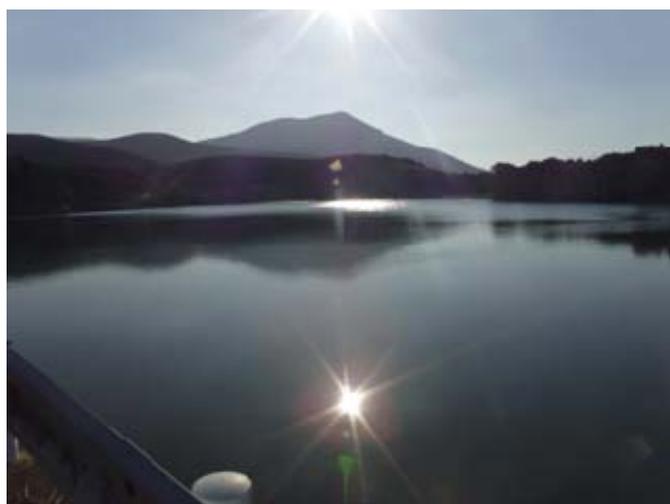


図9 四ツ池（蕪池）



図11 赤木茶畑と大村湾の夕日



図10 大野原高原

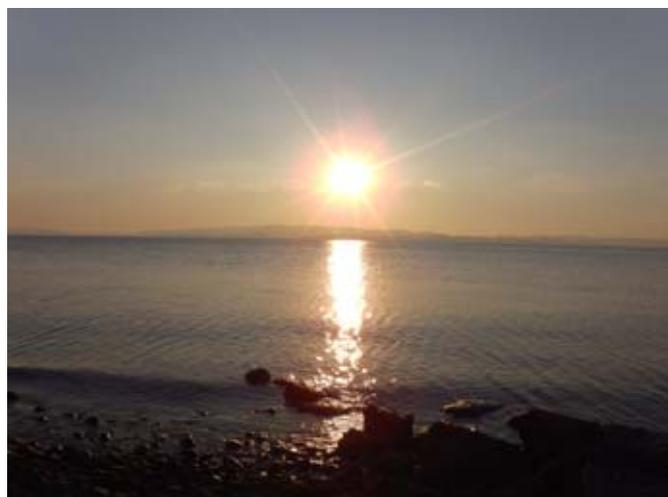


図12 彼杵海水浴場

### (3) 赤木茶畑

東彼杵はお茶の町としても有名であり、大村湾を一望できる高台には赤木茶畑が広がる(図11)。整然とした茶畑の緑と穏やかな大村湾の青、そして沈む夕日の赤というコントラストが素晴らしい。子どもにもこの情景は他と差別化されて目に映るようで、県北グリーンクラブの宮川さんの小学生の孫がこの風景を見たときに、「おじいちゃん、海まで近くだから走っていけそう！」と発したという言葉はこの風景の本質を得ている。夕暮れ時に渡邊町長が自ら、「とっておきの場所がある。」と案内して下さったのが、赤木茶畑であるが、町長は毎日通勤の途中でこの風景を眺めているという。美しさに常に感化され、東彼杵町の美しいまちづくりの政策に活かされているに違いない。

### (4) 彼杵川河口の海辺

彼杵川の河口には彼杵海水浴場(図12)がある。琴のかたちをした内海(閉鎖性海域)である大村湾は「琴の海」とも呼ばれ、海岸に打ち寄せる波音も穏やかである。松原と波音と夕日の風景は母性的な美しさを有している。海水浴やバーベキューに最適地で、海沿いの空き民家では合宿も可能とのことである。

また、日本二十六聖人の乗船場という悲しい歴史の舞台でもあり海岸沿いから川沿いに少し登るとこのことに関する看板が立っている。これを読んで海岸沿いに出ると、悲しい海の景色が広がり、まるでペドロ・パウチスタ(二十六聖人の一人)の声は今にも聞こえてきそうである。

## 6. 東彼杵の名勝選

東彼杵町の方々と我々訪問者で投票により選んだ見どころランキングは次の以下の通りである。また、学生独自に東彼杵八景を作ってみた。

#### 【参加者15名で選ぶ見どころランキング】

- 1位：千綿駅
- 2位：彼杵海水浴場
- 3位：赤木茶畑
- 4位：四ツ池
- 4位：大村湾の夕日
- 6位：龍頭泉
- 6位：坂本郷の棚田
- 8位：彼杵川河川公園

#### 【東彼杵八景】

- ・彼杵海水浴場
- ・千綿駅
- ・四ツ池
- ・彼杵川源流点からみる坂本郷棚田
- ・夕日の沈む赤木茶畑
- ・龍頭泉
- ・陸上自衛隊大野原演習場(大野原高原)
- ・いこいの広場からの星空

## 7. おわりに

東彼杵町には山、海、川、滝、池、茶畑、棚田といった美しい自然、日本の原風景ともいえる母性的風景があちこちにみられる。

東彼杵町では、町内に点在し、価値に気付かれていない、いわば埋もれてしまっているこれらの「宝」(潜在的価値)をどう活かし、東彼杵町の魅力としてどう発信していくかを考える動きが始まっている。それによって東彼杵町がどう輝いていくのか、これからが楽しみである。

今回の訪問にあたり、東彼杵町の渡邊悟町長、東彼杵町まちづくり課の皆様、東彼杵清流会の池田健一さん、県北グリーンクラブの宮川弘さん、その他多くの地元の方々にご案内とご尽力をいただきました。ここに記して感謝を申し上げます。

## 8. 参考資料

- 1) 総務省、平成25.3.31住民基本台帳年齢別人口(市町村別)(総計)。
- 2) 農林水産省2000、世界農業センサス。
- 3) 読売新聞1990、7月3日夕刊。
- 4) 東彼杵町歴史資料館ウェブサイト：<http://rekishi-higashisonogi.com/>(最終閲覧日：2014年5月28日)
- 5) 東彼杵町、四ツ池現地看板。
- 6) 東彼杵町教育委員会1999、東彼杵町誌 水と緑の道 上・下巻。

(筑波大学白川研究室東彼杵プロジェクトチーム：  
中前千佳・井坂七星・渥美元貴・鴨志田穂高・  
川畑遼介・森本健太・坂本貴啓・白川直樹)

※ 2013年12月の参加者は  
中前、鴨志田、川畑、坂本、白川



## 川系男子の『川と人』めぐり No. 24～富士川～

坂本貴啓 (筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 白川直樹研究室『川と人』ゼミ)

『川と人』  
めぐり

研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きでしようがない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介します。

♪あたまを雲の上に出し 四方の山を見下ろして  
かみなりさまを下にきく ふじは日本一の山

(唱歌『ふじの山』 作詞：巖谷小波，作曲：不詳)



図1 富士川流域図

### 1. 真夜中の出発

2014年5月22日～23日にかけて富士五湖、富士川へ川めぐりに出かけた。研究室の卒業生の同期の0君とY君と久々に会うことになり、せっかくならお互いよく周ったことが無い川を見に行こうということになった。川めぐりは太陽が出ている時間にいかんに川を巡れるかが勝負である。日の出とともに川を巡りたいため、夜中の2時につくばを出発し、日の出時間に山梨にいることを目指した。富士川水系で

はないが富士山周辺の富士五湖にも立ち寄り、富士川に入った。

富士川水系(図1)は流域面積3,990 km<sup>2</sup>、流路延長128 kmの甲府盆地を流れ、静岡側へ東流し、駿河湾に注ぐ河川である。特に山梨県側の支流の笛吹川の合流前の本川は釜無川と呼ばれており、淵のない川という意味に由来するという。また富士川は隣接している他流域の数が淀川について多い。

今回は研究室の友人との旧交を温めながら、富士川流域の魅力を探った。



図2 白糸の滝



図3 大沢崩れの全容と砂防箇所  
(図は富士砂防事務所 HP より引用)



図4 大沢扇状地の床固め群

## 2. 白糸の滝

明け方、富士宮市に到着。ほとんど寝ずに来たため、眠さのピーク。友人の運転でたどり着いた時には川巡り欲よりも睡眠欲のほうが勝ろうとしていた。

しかしながら、視界に飛び込んできた滝をみて、覚醒した。視界一面に何本にも連なり、流れる滝は壮大で、これは日本かと思わせるような風景であった(図2)。

富士宮市の白糸の滝は富士山の雪解け水が崖の絶壁から湧き出しており、高さ20m、幅150mの名瀑で、国の名勝及び天然記念物にも指定されている(富士宮市「白糸の滝」HPより)。幾重にも白い糸のように滝が流れ落ち、美しい。2013年には「富士山-信仰の対象と芸術の源泉」の構成資産の一つとして世界文化遺産に登録されている。

全国に白糸の滝と名の着く滝はいくつもあるが、落差、幅ともにこれだけの規模がある白糸の滝はここだけであろう。

180度近くを開ける視界と絶え間なく流れ落ちる水の音はその場にいるだけで心地よさを与えてくれる。

## 3. 大沢崩れ

白糸の滝を後にし、富士山の麓付近へ。富士山の西斜面に大沢崩れと呼ばれる大規模崩壊地がある。山頂直下から標高2,200m付近まで、延長2.1km、最大幅500m、最大深さ150m、崩壊面積1km<sup>2</sup>、崩壊土量7,500万m<sup>3</sup>(約東京ドーム60杯分)といわれ、わが国最大規模である。大沢崩れの形成年は明らかにされていないが、年代測定の結果から1000年前のものだと計測されている。大沢崩れを源とする大沢川は富士山に沿って、続く溪流河川で、源頭部、峡谷部、中流部、岩碑部を流下した後、標高700m付近の広大な大沢扇状地を経て、富士宮市を流下し、田子の浦港に注ぐ。洪水時には星山放水路により、富士川にも放流される(富士砂防事務所HPより)。

土砂の発生を抑えるため富士砂防事務所では土砂発生を抑える様々な砂防事業が行われている(図3)。

そのうちのひとつの大沢扇状地付近を訪ねた。この付近は昭和47年と昭和54年に大きな土砂災害が発生し、扇状地に遊砂地や床固め群を設けて、土砂の流下防止を行っている(図4)。遊砂地とは土石流などの土砂を貯留できる場所のことであり、何段にも続く、大沢扇状地の床固め群は普段は非常にスケールが大きい。普段は何も流れていないが、災害時には大量の土砂が流れ込む可能性がある。



図5 笛吹川の万力林



図7 釜無川の信玄堤

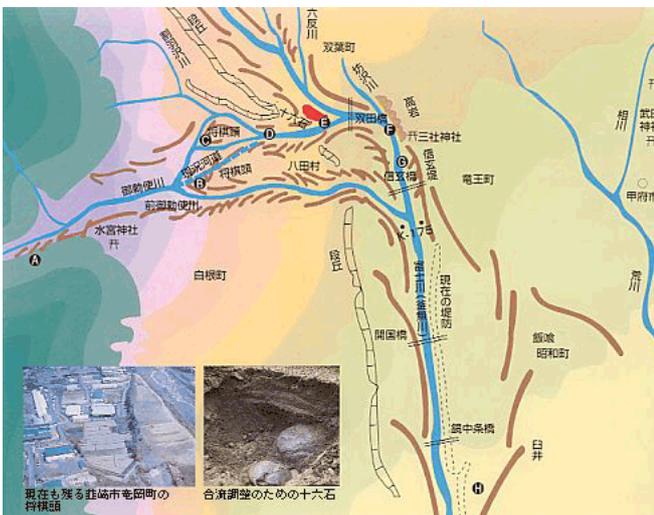


図6 御勅使川と釜無川の治水事業

#### 4. 武田信玄の治水

富士川流域を語る上で、武田信玄なしには語れない。ご存じのとおり武田信玄は戦国時代の武将である。水害常襲地帯であった甲斐の国を守るために様々な取り組みをした。

昔の武将は武勇に優れた将であるのと同時に優れた治水家でもあった。水を治める者は国を治めるともいうように、野中劔山、加藤清正、成富兵庫なども一例である。

武田信玄は富士川一体に様々な治水事業を展開してきた。有名なものとして万力林、信玄堤、雁堤などがある。武田信玄の治水事業の箇所について解説する。

##### 4. 1 笛吹川の万力林

富士川の支流、笛吹川を訪ねた。山梨市を流れる笛吹川は重川、日川、金川の3つの河川が合流する場所があり、甲州三大水難所といわれるほどの洪水常襲地帯であった。戦国時代武田信玄が治水事業を行った場所としても有名で、万力林(図5)と呼ばれる水害防備林が治水対策として施されてきた。

甲斐の国を守るために万力の地先で洪水を防御す

るために差出の1番出しから瀬股までの間に高さ1丈8尺(約5.4m)堤防敷幅18間(32.4m)の堤防を築造すると共に木も植栽したと記録されている(甲府河川国道事務所HPより)。たくさん植えられた木が洪水を緩和し、まちを水害から救ってきた。

万力林は現在も万力公園内にみることができる。公園内は動物園も併設されていて市民の憩いの場となっている。

##### 4. 2 御勅使川・釜無川の信玄堤

富士川は甲府付近では釜無川という名で知られている。釜無川の右岸側から合流してくる支流に御勅使川がある。御勅使川は河床勾配が1/60以上の極めて急流な河川であり、土砂量も非常に多い河川で、釜無川との合流点にそのまま洪水や土砂が押し寄せると極めて危険であった。

そのため信玄は釜無川と御勅使川セットの治水計画を打ち出した。これらの地区にある信玄の計画した堤がいわゆる信玄堤である。

まず、御勅使川の氾濫のたび変わる河道を固定することとなり、石積出しの設置をし、河道の安定化、新河道の開削などを行って流路を2分させ、水流を弱めた。さらに合流部では、御勅使川の勢いを弱めるため、合流前に大きな巨石を十六か所置き、釜無川との合流を調整、さらにはその先の合流部の釜無川右岸側の「高岩」にまず水をぶつけ、堤防を直接水が襲わないようにした。

釜無川合流後は釜無川を暴れさせずに水制で流れを導き下流へと流す(図7)。また水害時には霞堤が機能するようになっており、緩やかに氾濫させ、洪水を緩和する策を取っている。

武田信玄の治水の特徴は水の運動エネルギーをよく熟知しており、水を受け流す続べを基本としている。

信玄は堤建設後も維持管理を住民で行っていきけるように、治水事業に対するお祭りを開くようにソフト対策も指示しており、現在でも「お御幸さん」として人々に大切にされている。



図8 地方病流行終息の碑



図9 体長8mmほどのミヤイリガイ

## 5. 甲府の地方病

甲府市に隣接する昭和町にある風土伝承館昭館杉浦医院を訪ねた。ここには『地方病流行終息の碑』が山梨県知事によって建立されている(図8)。

地方病とは日本充血吸虫症のことで、日本充血吸虫という寄生虫が体内に侵入することで発生する寄生虫病である。山梨県甲府盆地底部、茨城県の利根川下流域、沼田川流域の深案部片山地区、筑後川下流域の福岡県及び佐賀県の一部など、ごく限られた地域にのみ存在した風土病である。発症すると、高熱や嘔吐を繰り返すようになり、次第に腹部が膨れていき、最終的には死に至ることもしばしばであった。甲府盆地一帯は四地域の中でも感染者が最も多い。

何が原因で起こるかも分からず、治療方法も分からない原因不明の病気に対し、原因究明と治療法の解明も急がれた。

### 5.1 原因の解明

1904年、桂田富士郎と三神三朗により、この症状の原因は日本充血吸虫という寄生虫によるものだということが発覚した。ヒト以外にもイヌ、ネコ、ウ



図10 杉浦健三(左)と三郎(右)の父子医師

シなどにも感染しやすく、腹が膨らんでいる症状が見受けられた。

しかしながらこれらの発見だけでは、日本充血吸虫がどういう経路で寄生するかが分からず、感染経路の特定が急がれた。

土屋岩保、藤浪鑑らによって、日本充血吸虫の体内への感染経路は水を媒介にしているのではないかという仮説が提唱され始めた。確証はないものの、有病地では川や用水路の水を飲むことを禁止した。水による媒介は口からなのか、皮膚からなのか分からず、解明が急がれた。

その結果、松浦有志太郎による自らへの感染実験により、皮膚からであることが判明した。有病地では川や水田に入ると足や手が赤くかぶれることがあり、地域ではこれを泥かぶれと呼んでいた。これこそが日本充血吸虫が皮膚を食い破り、体内に入り込む瞬間であった。

徐々に様々なことが明らかになってきたが、日本充血吸虫が成虫になるにはミラシジウムという幼生の段階と、皮膚から感染するセルカリアという形態、形状が異なることが判明し、日本充血吸虫が成虫になるためには中間宿主が必要であることが明らかになった。

では、人間を宿主にする前の中間宿主は何か？これが分かれば発生源を特定でき、地方病撲滅に前身するため早速中間宿主探しが始まった。

九州帝国大学の宮入慶之輔により、体長8mmほどの巻貝が中間宿主であること発見し、新種であったため、「ミヤイリガイ」と名付けられた(図9)。

### 5.2 まち医者活躍-杉浦健三と三郎父子の活躍

日本充血吸虫の感染経路が分かってからはミヤイリガイの駆除が有病地で始まった。中巨摩郡西城村(現昭和町)でまち医者を営んでいた、杉浦健三医師(父)、三郎(息子)父子(図11)は予防のための啓発活動に貢献した。この病気を撲滅するためにはミヤイリガイを駆除するしかないと考え、ミヤイリガイの天敵であるホタルの養殖をしたり、捕食動物としてアヒルなどを飼育したりするなど私財を投じて撲滅活動を開始した。また、子ども達への感染



図11 釜口峡（左）と富士川大流路（右）



図12 富士川河口

の防止を呼び掛けるため、日本充血吸虫病に関する冊子「俺は地方病博士」を2万份発行し、子供達に配布する等して、感染防止を徹底して呼びかけた。

そういう地道な活動が甲府盆地、山梨県全体でムーブメントとなり、撲滅まで県民一眼となって取り組んだ。撲滅のための具体策として、ミヤイリガイの捕獲も行われたが、一番効果が高かったのは、生石灰の配布であった。またミヤイリガイは流れの淀んだところを好むということから、用水路をコンクリートし、流速を早めるなどのインフラ整備が進んだ。その他にも、甲府盆地の夏の暑さに子供に川で遊ぶなどというのは酷なので、学校プールの建設も優先的に進んだ。

また、2人の医師は親子2代に渡って献身的に患者の治療にあたった。学校検診に行くと、初期症状の段階ですぐに感染者かそうでないかを見分けることができたという。

治療薬が開発されてからは治療が行えるようになり、多くの患者を救うことができた。また、治療費が払えない患者に対しても治療を施したり、自らの家で栄養をつけさせたりとまち医者として地域に根付いた医療活動を行ってきたのは甲府の地方病撲滅の功労者である。

地方病は終息した。しかし、完全に日本充血吸虫とミヤイリガイが消えたとは言い切れない。実際にフィリピンなどでは現在も感染者がいる。

現在、日本で発症者が出たら、高熱と嘔吐、腕の赤い斑紋の初期症状だけで日本充血吸虫病と判断できる人がどれほどいるだろうか？お腹が膨らみ始めて、末期の症状になってからしか気が付かない人も多いのではなからうか？

そんな地方病をここではしっかりと伝承している。

## 6. 舟運最大の難所 釜口峡

次に釜口峡を訪ねた。富士川は最上川、球磨川とともに日本三大急流と呼ばれていて、釜口峡は富士川の中でも最も狭まった箇所である。急流河川であ

り、狭窄部も多かったため、舟運が思うように発達しなかった。そこで徳川家康は角倉了以に舟運路の開削を指示した。

これにより、交易が盛んになり、甲州の経済活動が活発に行われるようになった。

図11には2つの流路があるが、恐らく、左側が本来の流路（釜口峡）であり、右側は後から開削した分水路ではないだろうか？（河川管理者に確認していないので、確証はないが。）

## 7. 富士川のフィナーレ

富士川を2日間かけて下り、流域のあらゆる箇所をみた。今回、執筆時間の関係で掲載できなかった、荒川ダムなど上流域のダムも魅力的な箇所が多くあった。また釜無川の流路にはオオキンケイギクも多く繁茂していて、一見綺麗なのだが、これもアレチウリやハリエンジュと同じ特定外来種として河川生態系を脅かす種である。あまりにも多く河川敷や堤防沿いに生えていたので管理者は気が付いているのか少し気になった。

富士川をどんどん下り、三人が最後の訪問箇所として選んだのは河口。研究室の川めぐりの暗黙のルールとしてしっかり三人それぞれが認識している。河口は閉塞気味であり土砂供給と沿岸流の関係はどうなっているのか気になった。

河口に立ち、駿河湾をみつめ、富士川めぐりは無事に終わった。富士川めぐりを通して研究室の同期との旧交も温めることもでき、楽しい2日間であった。



## 水辺からのメッセージ No.61

岡村幸二 (JRRN 会員)

### しずかな海に向いて： 相馬原釜地区の笠岩公園前に建立された 207 名の慰霊碑



撮影：2014 年 5 月 (福島県・相馬市原釜)

#### ◆ 3 年経過して慰霊碑建つ

相馬の海はどれだけ蘇ってきたのでしょうか。震災で破壊された漁業関連基盤の再生が進み、漁具倉庫施設等の完成により、水産業の早期経営再開を目指します。しかし、埠頭に並ぶ漁船からは元気な漁師の声は聞かれません。風評被害が根強く漁に出ない日が続きます。

#### ◆ 原釜海水浴場の復活はまだ

相馬の海にはエネルギー重要港湾、相馬漁港、海水浴場の 3 つの特性があります。夏季には福島方面から海水浴目的の車が渋滞し、風光明媚な松川浦周辺に活気をもたらしました。海水浴場の 1 日も早い復活が望まれます。

#### ■ JRRN 会員皆様からの寄稿記事を募集しています！

旅先で見かけた水辺の風景や思い、水辺再生に関わる様々な活動報告、また河川環境再生に役立つ技術等、JRRN 団体・個人会員皆様からの寄稿記事をお待ちしています。(JRRN 事務局)



(国内の河川・流域再生に関する主なイベント)

■ 2014年度河川技術に関するシンポジウム

○日時：2014年6月5日(木)～6日(金)

○主催：土木学会水工学委員会河川部会

○場所：東京大学農学部 弥生講堂 (東京)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1831.html>

■ 「大槌学の地平から考える復興」シンポジウム

○日時：2014年6月14日(日) 13:30 - 16:45

○主催：シンポジウム実行委員会

○場所：大槌町中央公民館 (岩手県上閉伊郡大槌町)

<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1890.html>

■ 皆様からのイベント情報提供をお待ちしています！

全国で河川再生に関わる様々な行事が開催されています。ローカル情報のPRや共有を目的に、皆様からの情報提供をお待ちしております。(JRRN事務局)

(海外の河川・流域再生に関する主なイベント)

- 2014.6.1-5(シンガポール) Singapore International Water Week
- 2014.6.23-27(トロンハイム/ノルウェー) EcoHydraulics 2014
- 2014.6.25-27(ブリスベン/豪州) 5th Int. Symposium on Hydraulic Structures
- 2014.7.21-25(マナウス/ブラジル) 2nd Int. Conf. on the Status and Future of the World's Large Rivers
- 2014.9.2-5(カタローニャ/スペイン) Cong. on Industrial and Agricultural Canals
- 2014.9.15-19(キャンベラ/豪州) 17th International Riversymposium
- 2014.9.21-26(リスボン/ポルトガル) IWA World Water Congress & Exhibition
- 2014.9.21-24(ハノイ/ベトナム) 19th IAHR-APD 2014 Congress
- 2014.9.28-10.2 (ハンブルク/ドイツ) 11th International Conference on Hydrosience & Engineering
- 2014.10.27-29 (ウィーン/オーストリア) European River Restoration Conf. 2014
- 2014.11.19-21 (マリキナ/フィリピン) 2nd Philippine International River Summit
- 2015.3.6-8 (ダッカ/バングラ) 5th Int. Conf. on Water and Flood Management
- 2015.4.12-17(Daegu/韓国) 7th World Water Forum
- 2015.6.28-7.3(ハーグ/オランダ) 36th IAHR World Congress

※詳しくはARRNウェブサイト内の国際会議ページをご参照下さい。→<http://www.a-rr.net/news/conference/>

書籍等の紹介 Publications

■ 東京2020計画地図 (2014.2 発刊)

- ・編著：東京都市計画研究会
- ・出版社：かんき出版
- ・価格：1,470円
- ・ISBN-13：978-4761269746
- ・出版年月：2014年2月

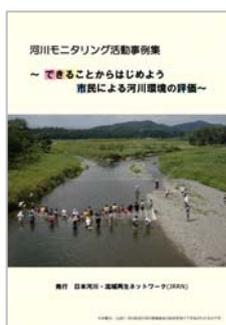


JRRN代表理事・土屋信行がメンバーに属する「東京都市計画研究会」編集の新刊本です。

「銀座に川がよみがえる」「川・運河を観光船が走りまわる」など、2020年の東京の川や水辺に関する話題も豊富に登場しております。

■ 河川モニタリング活動事例集～できることから始めよう 市民による河川環境の評価～(2014.3 発刊)

- ・執筆協力：河川再生に携わる市民団体や行政機関
- ・発行：日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN)
- ・出版年月：2014年3月



市民が主体的に取り組む河川環境のモニタリング活動の実態を調べ、各地のモニタリング活動事例や市民による河川モニタリング活動の更なる活性化に向けたヒントを紹介しています。

※本冊子の入手方法

JRRN事務局までご連絡ください。送料のみご負担頂いた上で、無料で提供致します。(JRRN会員限定)

[info@a-rr.net](mailto:info@a-rr.net) / 電話：03-6228-3862

■ JRRN の登録資格 (団体・個人)

JRRN への登録は、団体・個人を問わず無料です。  
市民団体、行政機関、民間企業、研究者、個人等、所属団体や機関を問わず、河川再生に携わる皆様のご参加を歓迎いたします。

■ 会員の特典

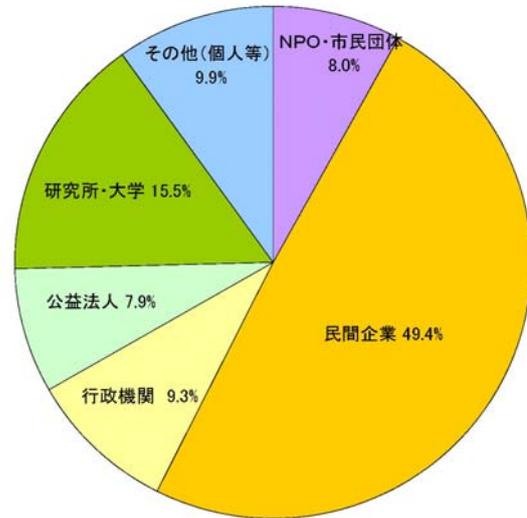
会員登録をされた方々へ、様々な「会員の特典」をご用意しています。

- (1) 国内外の河川再生に関するニュースを集約した「JRRN ニュースメール」が週 1 回メール配信されます。
- (2) 国内外のセミナー、ワークショップ等の開催情報が入手できます。また JRRN 主催行事に優先的に参加することが出来ます。
- (3) 必要に応じた国内外の河川再生事例等の情報収集の支援を受けられます。
- (4) JRRN を通じて、河川再生に関する技術情報やイベント開催案内等を国内外に発信できます。
- (5) 韓国、中国をはじめとする、ARRN 加盟国内の河川再生関連ネットワークと人的交流の橋渡しの支援を受けられます。

■ 会員登録方法

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.a-rr.net/jp/member/registration.html>



2014年5月31日時点の個人会員構成  
(個人会員数：659名、団体会員数：53団体)

JRRN 会員特典一覧表(団体会員・個人会員)

提供サービス	JRRN 個人会員	JRRN 団体会員	非会員 (一般)
1 ホームページへのアクセス及び記事へのコメント入力 ※1	◎	◎	◎
2 ホームページ「イベント情報」欄でのイベント掲載 ※2	◎	◎	◎
3 ニュースメール(週1回)の配信 ※3	◎	◎	×
4 Newsletter(毎月)及び年次報告書(年1回)等の発刊案内メールの配信 ※3	◎	◎	×
5 JRRN/ARRN主催行事の優先案内・優先参加 ※4	◎	◎	×
6 国内外の河川再生関連情報・技術収集や専門家・組織紹介の支援 ※5	◎	◎	×
7 ホームページ「会員からのお知らせ」内及びニュースメール「会員からのご案内」欄で団体が関わる行事・出版物・製品等の案内の掲載 ※6	△※7	◎	×
8 ホームページ「会員登録状況」「国内団体」内及び年次報告書内で団体名の掲載	×	◎	×
9 ARRN活動に関連する英語ニュース(ARRN Newsletter等)の不定期配信 ※8	×	◎	×
10 JRRN及びARRNが保有する国内外専門家・団体等との連携等の支援 ※9	×	◎	×

会員特典詳細はウェブサイト参照：<http://www.a-rr.net/jp/member/benefit.html>

【お気軽にお問い合わせください】

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 事務局



〒104-0033 東京都中央区新川1丁目17番24号 新川中央ビル7階

公益財団法人リバーフロント研究所 内

Tel: 03-6228-3862 Fax: 03-3523-0640 E-mail: [info@a-rr.net](mailto:info@a-rr.net)

URL: <http://www.a-rr.net/jp/> Facebook: <https://www.facebook.com/JapanRRN>

JRRN 事務局は、「アジアにおける河川再生のためのネットワーク構築と活用に関する研究」の一環として、公益財団法人リバーフロント研究所と株式会社建設技術研究所国土文化研究所が公益を目的に運営を担っています。

